

家族の未来をみやるために ——『家族心理学』の刊行によせて

中 釜 洋 子

▼青年にとっての家族

歴代の青年たちは、どれほどのエネルギーを費やして家族と関わり、家族にどんな想いを抱いてきたのだろう。知的学びとして、また自分自身の生き方と関わりさせて、彼らは、家族心理学のどのあたりに興味関心を見出すだろうか。

しばしばこんなことを考えていた。昔と今とで、青年の姿に大きな違いがあると感じられたからである。いきなり三〇年も昔の話を持ち出して恐縮だが、私がまだ大学生だった頃、青年た

ちの多くは今よりずっと家族に淡泊だった印象がある。長く天涯孤独に生きてきたかのような顔をして、生まれ落ちた直後から自力で歩き自給自足し

て、お世話になった親や家族など誰もいないかのような大きな態度で、社会について語り、日本について、世界情勢について議論する存在と見えていた。だから家族心理学を教えるようになってまだ日が浅い時期には、二〇代はじめの若者たちは、家族心理学をどのようにに受け止めるだろうかという問いが頭に浮かんで、教壇にたって授業を展開しながらも、学生たちの反応を

とりわけ丁寧にとどっている自分があった。

数年が経つうち、善くも悪くも上述の疑問の大方は姿を消していった。男子学生、女子学生の別を問わず、この領域に興味関心を抱く学生が相当数のぼると確信したからである。少なくとも数の学生たちが受講登録をして、細やかな視線を駆使して、家族のこゝと、家族内の心理力動を理解し、さらによい状態を築くというテーマに好奇心を抱いている。フィードバックペーパーにも、家族一般について長く感じてきた疑問が書かれることもあり、ま

た、自分の家族について理解が進んだこと、見えてきたことを率直に書き記してゆく学生も少なくない。もちろん「自分の家族の問題」にこだわって、何かにつけ家族や親のせいと告発せざるを得ない若者は、昔も今も一定数いることだろう。が、いわゆる健康な青年たちの中に、細部に目を配ることができる学生が確実に増えているらしいと感じられる。アイデンティティの確立が言われる青年の時期に入っようやく、家族に対して心配と細やかな配慮を向けることができるようになるらしく、それは私が大学生だった時代以上に、現代青年がよく行っていることらしいと新鮮な驚きとともに発見した。

▼家族への目を持つ若い世代

上述のことはもちろん私の主観的意見であり、意見を実証する統計データ

情という綺麗な衣をまとった残酷な場とされる。時と場合に依じて前者が持ち出されたり、後者が論じられたりといういろいろだが、多くの家族の実態は、どちらの極にも完全には寄らず中間くらいにあることが多い。また、真空中に悪なる家族・聖なる家族が浮かんでいるわけでは決してなく、周囲の環境の支持と批判を受けて次第にどちらかの極へ追いやられてゆくのである。若者たちが求めているものも、社会が必要としているのも極論でなく、右に揺れ左に揺れる家族を歪みなく捉える視点と、否定の極へと追いやられてゆくのを防ぐ手立てであろう。

▼本書の執筆に込めた想い

以上の思考を経て、「若者たちが、そして一般の人々が家族についてよく知ることができる家族心理学のテキストブックを作ろう、専門的な問いにも

が存在するわけではまったくない。が、もしこのような変化が認められるなら、理由としては次の二つが挙がるだろう。一つは、家族の事件や問題が折々に伝えられ、多々指摘されることである。いまや家族は、熟考の対象となるに相応しい社会の一大関心事となっている。虐待や育児不安など、子育てをめぐる問題、パラサイトシングル、病気や障害を抱えて生きること、中高年の鬱、高齢者介護など、マスマディアを賑わす現代的テーマも、家族を絡めて考えると理解と対応がいっそう深く多様になる。そこに知的好奇心を寄せる学生も少なくない。

そしてもう一つの理由は、少子化、個人化と言われる現象の中で生じた変化なのではあるまいか。どんなに幸福な家族も時に問題を抱え、現代、親世代の迷いはいつまで経っても晴れず、大人たちも時に深く心を痛める。各人十分応え得るものを」と考えるようになった。これが本書の執筆に込めた想いである。具体的には次の三つの目標を掲げた。

一つは、親密な人間関係について、感傷的でなくファンタジックでもない理解をするために役立つ本づくりをしようという目標である。配偶者選択や結婚・夫婦について取り上げること、青年たちの心理教育としても重要である。

二つ目の目標は、家族に関する実証研究と臨床研究のいずれにも偏らないひろがりを持った学問として家族心理学を提示したいというもの。家族の心理学を取り上げた本は、少しずつ数が増えてきたとはいえ、まだまだ数少なく、偏らない視点に立つものとなると先例はきわめて少ない。

三つ目が、大学院に入り専門的な研究や勉強を始める前に手に入れておい

の細かな心の揺れが少数のメンバー間を結ぶ密な関係を伝って相互に響き合うのだろう。誰かが満足していなかったり苦しんでいる様子がびんびんと伝わり、共に暮らす者全員の反応を引き出す。家族メンバーが多世代にわたって数多くいた時代、ケア役割を家族の特定メンバーが一手に引き受けていた時代には起こらなかったことなのではないか。

一般に、家族についてよく抱かれるイメージは二つである。一つは、子どもが育まれるかけがいのない場である事実から来るもので、保護的な暖かい場であり多少のわがままも含めて受け入れられるというもの。肯定的イメージである。もう一つがその逆、期待はずれだった時に出てくる、児童虐待などの暗い事件が掻き立てる否定的イメージ。何かとんでもないことが起きて多少しも不思議でない恐怖の密室、愛

て欲しい知識やものの見方を提示したいというもの。これらのねらいを胸に、無藤清子さん（東京女子大学）、野末武義さん（明治学院大学）、布柴靖枝さん（東北工業大学）の三方に声をかけ共著者になっていただくお願いをした。全員が快諾して下さったことで、執筆作業が力強く始まった。

私を含めた四名の著者たちは、いずれも大学教師であり臨床心理学を専門としている。家族心理学への関心を深めるなかで、その授業を受け持ち、とりわけ家族の理解に立脚した臨床教育・研究指導を行うという意味で、わが国における家族心理学の構築と発展に力を注いでいる。なるべく現場の香りを盛り込みたいという希望から、さらには大ベテランから若手までさらに五名の方々にコラムの執筆をお願いした。読者の皆さんには、二種類の文章から、多様な実践活動に触れていた

くことができるのではないかとうれしく思っている。

▼改めて、家族はシステムである

改めて、家族心理学の特徴は何かと聞かれたら、迷わず、家族をシステムとして捉える視点を一貫して持っていることだと応えよう。システム理論が常に中心にあるわけだが、身につけることで非常に役立つのも、また、読者にとって最もとっつきにくくわかりづらいのも、実はこのシステム理論というものである。

よくよく考えてみれば、家族とは実に不思議な存在だ。時代とところ変われば、その標準形も理想形も随分変わる幅のあるものでありながら、どの文化、どの社会にも家族というものが存在する。社会的構成物でありながら、見方を変えると、家族の誕生からメンバーの独立や死によって家族が消えて

なくなるまで、いくつかの発達段階を順にたどってゆく生き物であるかのようにも捉えられる。多少の変化をもとせず、何事もなかったかのように元通りになる自己修復力を備えてもいれば、せつかく作りあげた安定を自ら壊して、次のステージに相応しい異なる安定をまた苦勞して築き上げる冒険家の性質も抱えている。

このシステム論の理解を中心に据えて、家族の現状と不思議を研究し、問題だらけの状況にもかならず存在するだろうシステムの力を引き出す方向で臨床実践を組み立てることが、家族心理学の役回りである。

さて、家族の研究と臨床援助実践は、どちらもまだまだ成長期というのが実際である。日本の場合、共同研究が多く行われているわけでなく、多額のファンドを後ろ盾にデータを集めら

れる見込みも少ない。部外者に侵入されることへの抵抗感を肌身に感じながら、地道に足を使ってデータ収集し、地道にシステムへの介入技法、関係を援助する技法を使えるようにならなければいけない。

本書の刊行が刺激となって、この領域に関心を抱く人が増え、家族の研究者と実践者が育つことに少しでも貢献できればこれほどにうれしいことはない。

(なががま・ひろこ)

|| 東京大学大学院教育学研究科教授

中金洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子
〔著〕

『家族心理学——家族システムの発達と臨床的援助』有斐閣ブックス ●好評発売中
A5判、三二〇頁、定価二四一五円(税込)